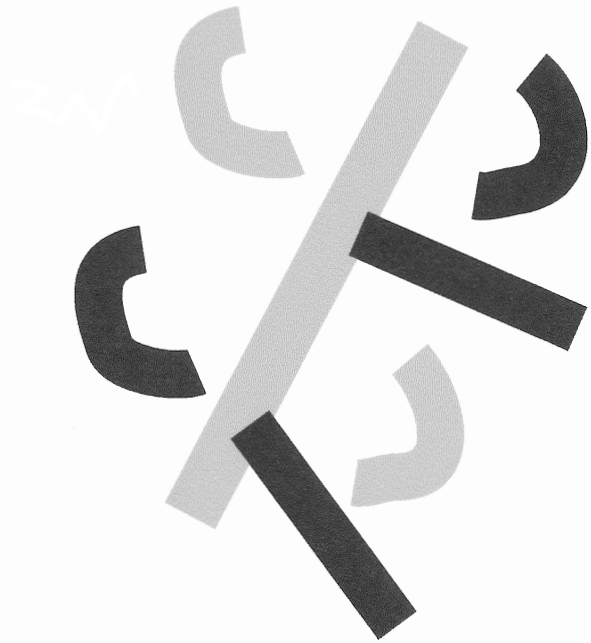

月 刊

Mélange

VOL.73



2012.08.05

詩・エッセイ・書評

月刊『Mélange』 VOL.73 ★

2012/08/05

月刊めらんじゅ編集部

詩

育ちゆくものが	川田あひる	03
最後の恋文	岩脇リーベル豊美	04
家族の墓	にしもとめぐみ	05
ベトナムにて抄	高木富子	06
切れ目	大橋愛由等	07
カトマンドウ警察署	千田草介	08
占める	高谷和幸	09
出棺	寺岡良信	10
通路	富哲世	11
書評		
高木富子詩集『優しい濾過』を読む	千田草介	12
エッセイ		
夜の調べに寄せて(オリンピック嫌いの弁)	寺岡良信	14
神戸詞あしび(神戸という都市の記憶)	大橋愛由等	16

「月刊めらんじゅ」73号目次

◆育ちゆくものが

川田あひる

木片が
散乱し
一本
いつぽんと
笹竹を
束ねるように
揃え
育ちゆくものたちが
静まる
棚に
高々と
据える
卵を
割る
卵黄だけが
要るのだ
いくつ卵を割っても
どろり
白身にまみれ
卵黄は
取り出せない
二度と
取り出せないのか
しつ

静かに
棚を
ひろ幅のテープで
とめてゆくひとがいる
育ちゆくものの基盤を
確かに構築してゆくもの
しつ
静かに
床に充滿する木くずを
吸い込むわたしを
しつ
静かに
テープ貼りつづけるものには
未来が
見えている
狭い
いや、
がらんだような
場所に
育ちゆくものがあるのに
育ちゆく
気配のさ中で
割れ卵の
白と
黄が
混ざった
落下の
空中停止を
を
いったい
どうすればいいというのか

◆最後の恋文

岩脇リーベル豊美

詩人は最後の恋文を書いた

そこには

内戦へと移行するファシストの武装蜂起が

町々でいつせいに惹き起こされた日付がある

詩人の死のひと月前の日付である

「ぼくの愛するJuanto」で書き出されている

詩人最後の恋文が発見される

恋人は詩人の残した書簡と素描を

自分の妹に渡して数年前に死んでいった

差出人の死後七十余年の隠蔽を経て

いま曝けだされようとしているが

永遠につづく喪の悲しみのなか

暗い恋のまま放っておかないか

詩人38歳

受取人当時19歳の学生

詩人が

彼をメキシコに連れ戻そうとする

旅の破綻は

後に独裁者と呼ばれるひとではなく

恋人の両親が

未成年を理由に了承しなかったことによる

かの地の空気に痛みは和らぎ

傷は他のどの国よりも早く癒えるというのに

叶わぬ旅の果てに待つ銃殺

死因は左翼思想と同性愛

詩人と恋人は

詩人がオリブ畑に己れの墓穴を掘らされるまで

フランコ軍占領のグラダナと

共和党政府に統治されたアルバセテに

別れて生きる、もしくは死ぬ

ぼくがどんなにお前を愛しているか――

もう誰にもわからなくなる

恋人は詩人の胸の中で眠っている

「君をこれほどまでに好きな

ぼつちやう頬より愛をこめて」

と結ばれている最後の恋文が発見されてから

◆家族の墓

にしもとめぐみ

夢にでてくるのはいつも古い家

父の下駄が小さな足に余って……

張り替えたばかりの板ガラスにぶつかって叱られる

廊下に　しゃがみ込んで作っていた貼り絵

夢にでてくる古い家

誰もいない家の外を歩いてみたり

古い畳に　窓から梢のゆらぎが映る

雨戸の節穴から逆さカメラの光絵

夢に出てくる古い家の

血脈は暮らしに縫い込まれ　父も母も白くなる

一日　一日掘り続けて来た　家族が墓になる

夢にでてくるのはいつも古い家

鳴らない黒電話　しずくの落ちない蛇口

命の残滓　用済みの日々がまだ燃える

◆ベトナムにて 抄

高木富子

ハノイ

旧市街の雑踏一軒の雑貨屋。色とりどりの雑貨が並べられた合間を縫って奥に入っていた。コンクリートの汚れた床が古いタイル張りの床に変わり、外の熱気がややくぐもり湿気を帯びた。先祖一族を祀る祠堂があり、黒漆塗の豪勢重厚が空間に覆いかぶさる。

男がいた。通路を通る私たちを背に上半身裸の男は俯いてひっそり書きものをしているようだ。あるいは彼はただ時間つぶしをしているのかもしれない。汗をうつすら浮かべて、いや、この土地に暮らし暑気に慣れた者は汗をかくことも殆どないかもしれない。皮膚の感覚が異なるのだから。

アナクロニズムの最たる景色のようにも思え、舞台のワンシーンのようなあれは何だったか。

彼は淀んだ湿度高い部屋で現世の何を見ていたのだろうか。

メルティングなのさ

メルティング・すべては融けていく

それを見ている

◆切れ目

大橋愛由等

へありていな他者である異処にたゆたうことは内なる他者と邂逅するための自己遡行である」と化身に伝えたのは自らのことだと気づく上がりかまち

出窓には闇が跋扈しているのだとビッグテイルの少女が言い張るので「夏の化身は一カ月生きる」と返すと漁労民の女たちがやにわに蛸の干物を浄土の方角に向かってちぎれんばかりに振り始める

聴きたいのはパテオの蛇の吃音ではなくて水冷式戦闘機・飛燕のエンジン音がジュボボボだったかザルルルだったのかであってその違いを知っている樽造り職人はずいぶん昔に樽舟に乗って化身と一緒に東方へ漂流していった

博物学者は何日も默劇を繰り返した果てに神父にむかつて「隠している始源をみせなさい」と詰問すると「化身というのは虫食いされた葉の孔は復活しないとあきらめるものだ」と謹厳に言うものだから階段踊り場の観葉植物の鉢の底に隠してあつた光を取り出し「これも聖人だろう」と反論する

祖霊にしつば捉まれ 彼らに連なり
この薄闇になお孤独がひろがる

祖霊たち、よ

ズシリ 掌に受けるにはあまりに重い

戦の埃たつ白い往還に姿一つなく

炎天の下 碎け散つてしまった事柄

仏も イエスも 疲れることはあるだろう

ホーおじさんは微笑み続け 些か疲れている

息つめていた憧れが炎になった日

生きていた あるいは生きていなかった

わたしは わたしは・・・何故会ったのか 何故遭

ったのか

露台上に登れば 風が動き

ざわめき ひしめく人の

揺るがない錯綜 長い記憶の帯が光る

ホイアン

一つの島に立ち寄る。貝象嵌細工の箱を作る二人の、中年、あるいは初老の男

まだ十分若いはずなのに最早この世に新しいこと

を見いだせない、ただ耐えることと観念した

男・・・外人観光客たちが暑さに閉口して

土産物などもはや眼中にない様子に わしらもあ

なたには興味はないと感じているのかいないの

か、ただひたすら作業している。

ああ、貝の粉塵が彼の胸に降り積みませんように。

足が萎え収縮してしまい

腰から下の体をもう自分で制御しているのかさえ

定かではない。変身、とんでもないものへの変身、悲しみへの変身。

彼の生涯とは何であるか。

滲み流れ大気の中で光っている。悲しみとも呼べ

ないものが光っている。

容赦なく時はわたしたちを奪っていく。彼の人生

に比べれば、わたしの生はまだ意味をなさない。

男は一点に目を凝らし貝殻を削っていた

象嵌細工の貝殻の粉塵に日長を暮らす

鳳凰木の赤が燃え 薄紫のハンラン 赤、黄のフ

ン 滴り

丈高い檳榔樹 沼を覆う蓮

荒れ土に生え繁り 荒れ土を隠すものたち、よ

人の営み、よ

ひたひた おとない びたびた しみこみ

したした 霧が寄り添う

雨期が始まった

額の鬚の青さは情念の暗さだろうか

いや、情念を通り越し

委縮した脚の彼の人は

真昼 白々の光の中で うずくまる

君はゴジンジェムを知っているか

君はグエンカオキを知っているか

声が尾を引いてわたしの中を旋回する

問われればイエスとも答えようか しかし

「知る」とは何であるか

歪んだ鏡に我が身を映す

今年も「亡者」に出会うために瓜の漬け物を食べ倒壊した家屋の鍵を別のガラス瓶に移し替えラデオ体操を緩慢に行い南溟に棲む化身に一枚の葉書をしたためバナナフルーツジュースを呑み黒猫と鼻をすり合わせアイスキュロスのクロスと唱和し「あ」の声を朝の蝶に奪われてしまった納戸の前に立つ

固形化された風を舌にころがしながら居間で聖霊の失禁を処理するために『火刑にされた化身たちの遺言集』中世篇を五頁ぶん破り拭きだそうとすると書籍から逃げ出したのが「真理」「神」「物象」の文字たちであった

「やあ」と力なく郵便配達夫にメールボックスの前で挨拶する化身は「空虚を考えて昨日も眠れなかった」と言うのだがすべての空虚は朝日の逆光の中できらきら光る蜘蛛の巣の形状をタブロー化すればたちどころに解析できることを知っているのは郵便配達夫であり朝の蝶であり亡者であり他者なのだが……

◆カトマンドウ警察署

千田草介

人がひとり死んだので警察署につれていかれた。「ジス・イズ・ノット・ポリス・ケース」と、大使館から付添いで来てくれたS氏がたどたどしい英語で言う。私は机に並ぶ三人の男たちと差向いで椅子に坐った。腰から鍵束を垂らして革長靴をコツコツ鳴らす男はいかにも強持てだ。なるほど、この国は屈強なグルカ兵を輩出しているのだと思う。メガネをかけた係官は高校の同級生のひとりにどことなく似ている。もうひとりの年配の男が、「ネパールは初めてか」と訊ねた。こうしていると就職活動の面接を受けているみたいな感じがしないでもないが、私の左横にいるもうひとりの若い男を見ると、やはりお白州吟味にちがいないのであった。男は私同様に警官たちに尋問されているが、私が椅子に坐らされているのに対し、この男は学校で叱られた生徒のように立たされている。男は明白にポリス・ケースに相当する悪事をやつたとみえて、係官たちの尋問口調が険しい。もうひとり、サリーをまとった若い女がいて、なにやらはげしい口調で係官に言いつのつている。ネパール語かネワール語か、現地の言葉なので言っていることは皆目わからないのだが、S氏の相棒である日本語のうまい通訳が教えてくれた。男が女をレイプしようとしたのだと。件の男を横目で見ると、さほど性根の悪い奴とは思えず、目つきがおどおどしてむしろ気の弱そうな感じである。男が襲いかかったという女のほうはたしかに美人の範疇に入るが勝気な印象だ。私が男の立場であれば欲情をおぼえるだろうかと考える。あり得るかもしれない。そう思うと男に同情しそうになる。きつとこの男はたんなる獣欲で女に迫ったのではない。恋慕をおさえられなかったのだろう。女の旦那が兄弟かわからないが、取り調べを終えた男の顔面に唾を吐きかけた。すべて、私のすぐそばでの出来事で、期せずして妙な見世物を無料で鑑賞したような気分であった。これで一件落着なのか、男がつかれ出されたあと、私は何枚もの書類に延々と署名をする作業に従事した。それがすんでやつと警察から解放されるのかと思っただけならさにあらず、まだ必要な書類があつて、それは署の前の広場で店開きしている代書屋にたのんで書いてもらわなければならない。取調室から出て、三階か四階にいることに気づいた。階段をのぼった記憶がなかった。吹き抜けの底をのぞくと、そこは留置場で、大勢の被疑者たちがうごめいている。S氏がぼつんと言った。「ネパール人も日本人を殺すようになった」東京でOLが殺害されたのだという。私はなぜか、顔も知らないその犯人が、さきほどの男と似ているような気がした。

◆占める

高谷和幸

・交差点で甘さを噛みしめる朝だ。玉子焼きをフォークでくずしてゆく時間だけがやけにすつぱくこみあげてくる。一歩ごとにねじれ、切り裂かれるのは無名のぼくだろうか。今日という一日は勘定できないほどぎたないものを吐き出そうとしているので、あなたは世界が胃袋なのか、あなたが胃袋なのか、分からないでいる。だから、こんな日はノミのようにジョン・ダンの詩のことばが生え際にびったりとあうと思う。ぼくというぼく、あなたというあなた。向き合えるのは個という透けた鏡だけだ。血管をゆつくりと流れる時間に耐えて、ふるえる縷なのがぼくたちだ。交差点で犇めく人たちに、死んだ狗のようにからだをつなげずにいる。自分の切りグチにケチャップをすりこみ、脚と手のない女が声をかける。「ありがとうございます」(手足を切っていただいて) 交差点はにがい香に燻され、甲高い深謝の消える先をバツタのように見ていた。手は帰らず、足はケチャップ。プスプスとただれた胃袋には、空きカンの双曲線があり、ふかい穴が口をあけている。「ありがとうございます。切断していただいて」 交差点は行き場のないものが引き裂かれる。ぼくというぼく。あなたというあなた。それを拉ぎ、叩いてから、次はキャベツを細かく割いて。

◆ 出棺

寺岡良信

死んだ水夫の胸の空席にカモメは舞ひ降りた
雲海から偷んだ火を象牙のパイプに点じて

出棺は落日よりも急がねばならない

海市に翳る墓碑よ――

廃墟を呑みつくす風が

午睡の目ざめの

汀まできてゐる

◆ 通路

富哲世

耳の道で

囁きの

通路で

窓をひらいて

木立の葉ずれの匂い

空のガラスの

澄んだ水色の響き

古い鏡に映る

しわぶぎや

立ち上がっては消える

水泡の唱えに躡きながら

日暮れと重なる朝の気配が

熟れるように

そよぎのそばで

広げた布の起伏の裾野で

小さないのちを啄む

小鳥の喉が交わし合う

絶えない呼び声の笛

木霊は咆哮好きな獣のふりをして

小屋根の陰に潜み

日毎のひそかな怯えを養う

傷んだ輝くからだを屈めて

翡翠の水に首を濯ぐ

流れの岸边に吹き寄せる

虚ろの舟に

口寄せるように

高木富士さんの第一詩集『優しい濾過』のなかに込められたものを、自分のもつ想念の透過膜をもつてまさに〈濾過〉してみたとき、そこに淡い耀きを放って顕われるのは、高木さんがそぐまなざしの遠さである。それはたんなる物理的な遠さではない。たしかに二部構成からなるこの詩集の「部」は、地中海世界への旅が結実させた詩が大半であり、かの地へいまだ足を向けたことのない読者には、

に二重映しに見えた。と同時に、私には感得できなかったものの、古代の女の狂える魂が、土の下からえぐり出され、白日のもとに晒されてそこにあるのが見えた。そして高木さん自身が、千数百年の時を超えてその魂と共鳴している！ 遠い過去のことを、いまを生きる自分の時間面にひきよせ、かさねている。旅人でありその地にあつては異邦人であるという位相から飛翔して、高木さんはおのが身

ともに、プラトンの『ティマイオス』が想起される。たとえてみるなら、イオン化した実存、とでもいうべきか。安定を得るべく、本来一つのものとしてあつた対の相手をもとめる。男女が惹き合うのはそのためだ。しかし異性という枠組みは矮小な括りにすぎない。高木さんのまなざしは過去に生きたすべての人びとに向けられる。これらの生きた痕跡に高木さんは旅の空間でふれ、想いをいたす。そのとき、人が不可逆な時間のなかにいることが、どうしようもない切なさをもたない胸をふさぐ。旅にかぎらず、部では自身の身近なところでの出来事に、まなざしがゆく。父の棺をずくずく濡らす点滴の液体への視線に、読む者もまた茫然とするほかない。(母がなんと遠いのだろう)とのつぶやき。(思い出す人なくなれば／思い出も消える)とはなんという寂しさか。(蟬の命の束の間は／わたしたちにもまた同じ)。うつろい、存在の儚さ、寄る辺なさを、吉野山で西行の気配に遭い、(みちゆきゆきてつひにおわりぬ)。しかしこのサンサーラの世界を(虚しくも生きよ)と雲にいわせ、高木さんは(それでも笑いながら優しく／「輪廻」の輪を廻して生きるよ／ずっとずっと廻していくよ)と、旅の終わりの、そのずっと向こうへと、まなざしをむけているのである。

書 評

プネウマにそよぐ言の葉叢

高木富士詩集『優しい濾過』

千田草介

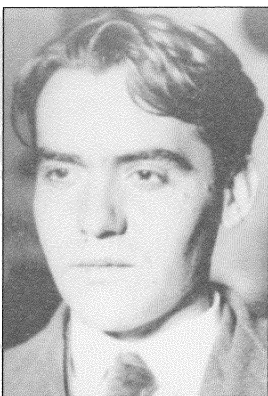


縁遠くてイメージを喚起しづらいところもあるうかと思う。しかも高木さんは時の軸を何百年、千年の単位で自在にさかのぼってみせる時間旅行者でもある。高木さんの時空は途方もなく広大なのである。及びもつかないが、私も一度だけが地中海の東辺に立ち、(崩れかけた円形劇場の／その隘路／通り抜け)たし、朝日射す廃都パルミラにたえずんだこともあるので、その記憶の光景が「ゼノビア」

を投げつけるように、目に見る対象に迫る。主客のへだたりを一気にのりこえ、距離を距離でなくしてしまおうとする力が、高木さんの詩にははたらいっているようだ。しかしいくら迫ってみても、けっして一体になることはできない。その哀しみが、この詩集には色濃く揺曳している。「あなたという二人称へ」が開巻劈頭におかれ、「部」において「エトルリアの棺を見たとき〈対幻想〉というタームと

ともに、プラトンの『ティマイオス』が想起される。たとえてみるなら、イオン化した実存、とでもいうべきか。安定を得るべく、本来一つのものとしてあつた対の相手をもとめる。男女が惹き合うのはそのためだ。しかし異性という枠組みは矮小な括りにすぎない。高木さんのまなざしは過去に生きたすべての人びとに向けられる。これらの生きた痕跡に高木さんは旅の空間でふれ、想いをいたす。そのとき、人が不可逆な時間のなかにいることが、どうしようもない切なさをもたない胸をふさぐ。旅にかぎらず、部では自身の身近なところでの出来事に、まなざしがゆく。父の棺をずくずく濡らす点滴の液体への視線に、読む者もまた茫然とするほかない。(母がなんと遠いのだろう)とのつぶやき。(思い出す人なくなれば／思い出も消える)とはなんという寂しさか。(蟬の命の束の間は／わたしたちにもまた同じ)。うつろい、存在の儚さ、寄る辺なさを、吉野山で西行の気配に遭い、(みちゆきゆきてつひにおわりぬ)。しかしこのサンサーラの世界を(虚しくも生きよ)と雲にいわせ、高木さんは(それでも笑いながら優しく／「輪廻」の輪を廻して生きるよ／ずっとずっと廻していくよ)と、旅の終わりの、そのずっと向こうへと、まなざしをむけているのである。

ロルカ詩祭



▼スケジュールと出演者

- ★開 場／午後5時
- ★第1部／午後5時30分～ロルカ詩の朗読 (1)アグスティン(2)今野和代(3)鼓直
- ★第2部(自作詩の朗読) 午後6時～／(4)大橋愛由等(5)岩脇リーベル豊美(6)にしもとめぐみ(7)寺岡良信(8)福田知子(9)情野千里(10)永井ますみ(11)夏石番矢(12)高谷和幸(13)安西佐有理(14)中堂けいこ(15)高木富士(16)大西隆志(17)富哲世(18)今野和代
- ◇演奏／ギタリスト川島隆臣

第15回

神戸から
祈りとともに
ロルカを謳う

ロルカ詩祭へのお誘い

安西佐有理

8月19日、一人の詩人がこの世を去った。スペインの詩人・劇作家・演出家、フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898.7.5～1936.8.19)は、スペイン市民戦争に、暗殺されたのだ。シビックに對抗したバルセロナ「人民オリンピック」が、内戦勃発で幻となり、残る者が市街戦に加わり、さらに諸国から義勇兵が集った夏でもあった。ロルカは、リベリを言重て、左派政府への支持も表明していたから、右派が集う叛乱軍の標的になったのだという。自分のことは「アナキスト、コミュニスト、自由主義者で、カトリック、伝統主義者、王政主義者」だと語っていたそうなのだが。76年後、神戸。ロルカ詩祭は、15回目その日を迎える。言葉を紡ぐ想像力の限界を知りながら、定義に捉われない生を求め、死ある世界と身体に宿る神秘を見つめた、詩人への敬愛。

そこに、17年前の1月17日への再生の誓い、1年前の3月11日への祈りや、川向こうへ先に戻った諸々の存在たちに対するそれぞれの想いを、静かに重ね合わせる場。しかしロルカは、銃弾での死後も、彼を慕う詩人たちによって、世界のあちこちで虐殺され続けたのではなかったか。悲劇のアイドル、大義の殉教者として、社会と個人の期待や幻滅を食われ、都合よく「翻訳」されて。その危険を承知で、私たちは向き合いたい。ロルカという身体から声を発した、そのひと。ロルカは、どこにいるのか。夜のスパーマーケットの、山積みのお菓子の傍らに、節電で急に薄暗くなった冷蔵品の棚を背景にして途方にくれる姿を見つめることも、できるかもしれない。あるいは、ロルカは自ら説き明かした「ドウエンデ(Duende)」——土地や血脈から発して芸術の原動力となる妖しい魅力——の一部となって、身体のことば、ことばの身体を揺り動かす、この詩祭の夜、発し手と聞き手の接点では、チャミングな彼に瞬時でも出会うかもしれないと想像してみるだけの軽やかな自由と平和ぐらいなら、まだ、ここにはある。

◆日時／2012年 8月18日(土)

◆料金／①コースA特別コース 3600円(スープ+サラダ+メインディッシュ(2品から選択)+パエリア+デザート+コーヒー+チャージ料・税込)

②コースB 2000円(One Drink + One Food +チャージ料・税込)

◆場所／神戸三宮

スペイン料理 カルメン

(阪急三宮駅西口から北へ徒歩2分)

◆問い合わせ先／

078-331-2228

金子兜太の第四句集『暗緑地誌』をめくっていたら、次のような作品に出会った。

二十のテレビにスタートダッシュの黒人ばかり

おそらくオリンピック陸上競技の実況中継を素材に構成された作品であろう。これを見たとき、私のなかに不思議に生々しい既視感が生じた。「二十のテレビ」から伝わり漂ってくる黒人選手の凝縮された緊張と汗の臭いが、私のうちに眠る遠い記憶を、既視感とともに蘇らせたようなのだ。

私は「東京オリンピック」のテレビ中継を中学校の図書室にかんづめになって観た。昭和三十七年と言えば高度経済成長の真つただ中であつたが、私がつた神戸の下町の中学は校区に貧しい地区を抱え、私の家も含めてテレビのない家庭が多かつた。

図書室で強制的に観せられた東京オリンピックに、感銘を受けた記憶はない。それどころか、教師が声援と拍手と万歳を強要するのが煩わしかつた。そんな私が、翌年上映された市川崑監督の記録映画『東京オリンピック』を友人と観に行つたのは、この映画にオリンピック担当大臣の河野一郎が「これは記録映画ではない」と感想を洩らしたことが、「記録・芸術論争」を越えて、ちよつとした政治問題と化していたからである。高校入学を目前に控えていた時期で、今振り返るに、私は実に生意気な少年だつたと思う。

映画は鮮明に憶えている。アフリカの新興国チャドから来た陸上選手をカメラは執拗に追いかけた。「彼はチャドから来た」「団長一人、コーチ一人、選手一人。新しい国はすべてにおいてゆとりがない」「だから彼は決勝に残つたとき、うれしかつた」「三國一朗がゆつたりと語るこんなナレーションが、選手の額か

された、自衛隊という組織の前近代性・閉鎖性を罵り、返す刀で、円谷氏がたどたどしい筆致で父母への不孝を詫びた遺書の「時代錯誤」を嘲笑つた。私にはその死の真相や心的動機は無論分らない。だが二十七歳の死は、当時の私にとつてもとてつもなく悲しいものに感じられた。そして私は出来事の基底に、オリンピックの選手を国民の英雄に祭り上げ、過剰な熱狂でもみくちやにする、近代国民国家の残酷で無責任なナショナリズムの生息を濃厚に嗅ぎ取つて、激しく憎悪した。以後一貫して、国威発揚や郷里の名譽を臆面もなく掲げるオリンピックは嫌いだ。ある。とは言つても、現在のオリンピックまでも国威発揚の道具と見なすのは、私の教条主義的な思い込みで、むしろ今は商業的利権や政治家の人気取りに傾いている面の方が大きいだろう。

五輪に公然と商業主義を持ち込み、開催地選抜をめぐる賄賂などの腐敗をはびこらせ、長野五輪では「お召し列車」を立てて現地入りしたと批判されたサマランチ。自分の支持率が維持され、かつ東京だけが潤えばよいのだとばかり、性懲りもなく誘致運動に血道を上げる石原慎太郎。しかし、こうした政治的野心家がオリンピックをおもちやにしている構図は、ナチスのプロパガンダと呼ばれたベルリン五輪（一九三六年）や大東亜共栄圏を喧伝するはずだつた「幻の東京五輪」（一九四〇年）と、どう違うのだろうか。

冒頭で私は金子兜太の句を引いて、それが私の既視感を呼び覚ましたと書いた。だが事実を重んずるなら、兜太の句の素材は、東京オリンピックではなく次のメキシコオリンピックのテレビ中継であろう。句が伝えるリアリティーから言つても、黒人とトラックの赤土とのコントラストが重要な構成要素になつていて、そのためにはテレビが、その時代に普及したカラーでなければならぬからだ。私も、繁華街の電気店の店頭

NO.043 寺岡良信

夜の調べに寄せて

オリンピック嫌いの弁

ら流れる汗と孤独な背中の中の映像にかぶさる。日の丸も日本選手のコメダルも厳かに奏される君が代も、遠景に退いて、この場面だけが深く印象に刻まれているのは、私だけではない。この映画を少年少女期に観た人たちと話をすれば、必ずこのことが話題にのぼるからだ。

これが映画人魂というものである。市川崑には、ときの政権や文部官僚、財界やマスメディアに迎合して軽薄で騒々しいだけの国威発揚映画をつくる気などさらさらなかつた。政府高官の一人が言うに事欠いて「黒人の汗ばかりが映っている」と難癖をつけたという噂も伝わってきたが、本当だとすれば、品性と識見の浅薄さが透けて見える露骨な横車と呼ぶほかない。

東京オリンピックは哲学者のような孤高の面持ちで黙々と走るマラソンのアベベをヒーローにしたが、二位で競技場に還つてきた円谷幸吉に観衆は狂喜した。だが映画が映しだす円谷の顔は苦痛に歪んでいた。体力が限界に達しているのは、誰の目にも明らかだつた。すぐ後ろを英国の選手が追走してくる。「ガンバレ円谷」と実況放送ではアナウンサーが絶叫したが、映画ではただ走りぬくことだけを念頭に自己と格闘している、その純朴にして悲愴な肢体と表情だけを静謐ともいふべきカメラワークでとらえていたと記憶する。はたして円谷は三位に後退してゴールに倒れ込んだ。

私が円谷選手のことを、今なお痛ましい思いで反芻するのは、メキシコオリンピックでは金メダルを獲ると宣言していた彼が、そのメキシコオリンピックの年、自らが所属する自衛隊体育学校の宿舍で自死したからである。私はその年、大学受験に失敗して一浪中であつた。学園紛争で日本中が騒然とし、いたるところで過激派学生と機動隊との流血の闘争が繰り返されていた。私の高校時代の友人で、その頃全共闘運動に傾倒していた人物は、円谷氏に過重な負担と心労を強いて死に至らしめたと指摘

でたくさんの画面が映し出すこのような画像を観た記憶がある。それにこの句を収載する『暗緑地誌』は昭和四十七年の出版なのだ。

『暗緑地誌』には、ヴェトナム戦争に材を採つた句がいくつか出てくる。

マリファナの汚辱の兵等雨期ベトナム

侵略の蒼牙えの肉撃たれたり

焼身の僧青めたりわれらが雨期

ヴェトナム戦争は最強国アメリカが体験した初めての敗戦であつたが、おびただしい数の兵士が密林の泥土に屍を晒した。そのもつとも危険な前線に投入されたのが黒人兵だつたという。それは公民権法の制定以後もアメリカ国家とその社会の中で、黒人差別が根を張り続けていたことを象徴的に物語っている。

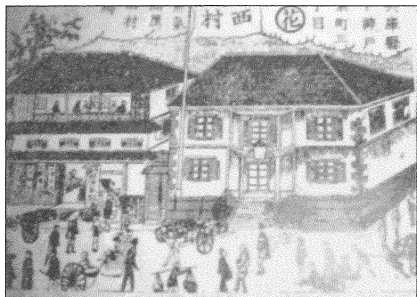
メキシコオリンピックでは、陸上二百メートルで金と銅を獲得したアメリカの二人の黒人選手が、表彰台の上で黒い手袋をした握り拳を星条旗に突き付けて除名処分となつた。過激な行為で、賛否両論が渦巻いたが、その背景には「病んだ」アメリカがあつた。

「二十のテレビにスタートダッシュの黒人ばかり」の句がそのことをどこまで意識していたのかは分からない。だがこの作品には、国威発揚と自己の野心、それに民族的出自といったさまざまな要因に引き裂かれながら、それにじつと堪えている情念の地鳴りにも似た呻きが、黒い塊として表出されていないだらうか。

そんな複雑で屈折したことがらをすべて無化するかのごとく、身も世もなく絶叫するアナウンサーやサポーターに、私はやはり馴染めない。

国威発揚あるいは政治的思惑と商業的利権

神戸詞あしび^{うた}



明治時代の西村旅館
(「ほんまに Vol.14」より転載)

62-2012.08 大橋愛由等

神戸という 都市の記憶

神戸の都市文化を考える機会がふたつほど続いた。
ひとつめ。今年で創立六〇周年を迎える「芸術文化団体・半どんの会」のこと。年に数冊発行される文化総合誌「半どん」の刊行を中心に活動していて、わたしもかつての発行人である小林秀雄さんの依頼によって何回かエッセイや俳句を投稿したことがある。この雑誌は母方の祖父である岸本邦巳や、父である大橋彦左衛門も寄稿していて親子三代にわたる付き合いである。
同会から「平成二三年度・半どんの会文化賞（現代芸術賞）」を頂くことになり、七月七日（土）兵庫県民会館で行われた授賞式に望んだ。受賞者はわたしを含めて13人。「現代芸術賞」のほかに「芸術文化功労賞」「及川記念芸術文化奨励賞」「小林記念県民感謝賞」がある（私と同じ現代芸術賞の受賞者に詩人の神尾和寿氏がいる）。

私は出版編集者として、過去な
んどか著者が出版関係
の賞を受賞

した現場にたちあつてきた。版元として記念会場に足を運んだことがあるが、自らが受賞者としてひな壇に登るのは、生まれてはじめての経験であった。このために当日は終始緊張していたことを告白しておこう。

この「半どん誌」、神戸市や兵庫県で活躍している表現者・文化人が多く寄稿していて、書かれたもののアーカイブスとして貴重である。残念ながらネットでも検索してもホームページがないために、メディアとしての蓄積が見えてこないのが現実である。せめ

て目次だけでもデータ化してネットで公開すれば、兵庫県の戦後文化史の大きな財産となるのだか。

もうひとつの話題は、神戸の都市文化遺産とも言い得る「へちま倶楽部」のことである。神戸市中央区栄町通三丁目の中突堤に向かう途中にあった西村旅館がその舞台であった。その旅館の当主である西村貫一が文化サロンとして戦後に作ったのが「へちま倶楽部」である。当時の神戸内外の文化人がこの倶楽部に入会していた。いわばわれわれ『Melange』の読書会・合評会の先輩格にあたる存在である。

この「へちま倶楽部」に父が通っていたのが昭和21年から24年にかけて。広島県大竹市の旧海軍特攻艇「蛟龍」の乗船訓練のさなかに終戦を迎え、家族が疎開していた奈良に向かうのだが、祖父・大橋千代造が神戸で旅館業を始めることになったため父も神戸に移り住むことになるのである。この時、父はまだ20歳代。血気盛んな世代であり、新しく住み始めた神戸という地で文化にかかわる先輩たちがあつまる「へちま倶楽部」に顔を出すことで、戦後という時代の移り変わりざまを全身で受容していたことであろう。わたしはかつて父からこの「へちま倶楽部」との関わりについての聞き書きをしたことがある。それを日記サイトに掲載していたのであるあとで父の記憶の正確さを確認することが出来た。その記事をネットで検索して私を訪れてきた人たちがいた。八月三日（金）に「へちまグループ」を名乗る九名ほどの人たちがわたし取材するのである。このグループは西村貫一のことを調べていてゆくゆくはなにかの形で記録しておきたいと願っている。

このグループの中で広角的に貫一について調べているのが、西北八島さんである。灘区で酒樽などを製造している「たるや 竹十」の八代目当主。わたしがまだ見ていなかった「へちま倶楽部」発行の「金曜」誌の何冊かを所持されている。この西北さん、飄然とした風貌もさることながら、驚くべき経歴の持ち主なのである。かつて島尾敏雄一家が昭和二七年まで住んでいた家（灘区）に昭和三七年から四五一年にかけて住んでいたというのだ。それを聴いてわたしは近日中に会って取材をしたいと申し出たのである。

詩と評論

月刊『Melange』VOL.73

めらんじゅ

2012年08月06日 通巻73号 ★

月刊『Melange』編集部発行所

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

大橋愛由等 〈『Melange』同人〉

Mobile 090-5069-1840

maroad@warp.or.jp

定価 500円（税込）